



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〈第七九号〉

春分 しゅんぶん

三月二十一日



神さんの貝

春はどこからやってくるのか、と問われたら、私は迷わず海と答えます。三月三日のひな祭りがもともとは磯遊びをして、邪気を払う日であったように、春先の潮風に吹かれると冷たいながらも気持ちが爽快になるものです。そして何と言っても志摩半島の浦々では、海女漁の口開け、海女漁が始まりました。

先日、七二歳の現役海女さんとお話をする機会がありました。日焼け顔はお肌もつるつるとしていて、健康そのものです。

「もう一分はよう潜らんな、せいぜい五〇秒ぐらい。五、六メートルは潜るかな」。口開けの頃は海水がまだ冷たく、お目当てのアワビは小さいのかと思いきや、むしろ大きなアワビが採れるのだそうです。なぜなら去年からアワビのいる場所の見当をつけているとのことでした。

「海の中も陸と同じように岩があったり、へこみがあったりするから、風のある日はここ、ない日はここと決めてあるの」。その口ぶりは潜るのが楽しくて仕方ないという風で、海女という職業がなぜ万葉の昔から連続と続いてきたのか、わかるように思いました。

アワビの身は血行を良くし、目や全身の疲れをとると妊婦や産後の女性が食べると良いとされてきました。また神宮の神饌でも大きなお祭に限り出される重要な海の幸です。また別の海女さんの家ではその貝がらを神棚に供える皿として使っていました。貝がらには管状に立ち上がった四、五個の呼吸孔がありますが、孔が五つ開いた貝がらを神さんの貝と呼び、神棚に供えるといえます。

海女さんのアワビへの深い感謝の気持ちが伝わってきました。今年も豊漁でありますように。

文 千種清美